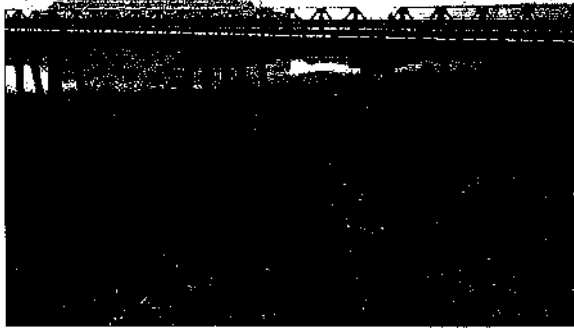


一、塩浜の生い立ち

I 塩浜の誕生

今、私たちが暮らしている塩浜に、いつ頃から人が住み始めたのでしょうか。はつきりしたことは分かりませんが、おおよそ平安時代の中期以降（約千年前）ではなにかと考えられています。

次ページの「日永六呂見古地図」は、四日市市史昭和三十六年版から写したものです。原図は六呂見町の八鳥家に古くから伝わったものです。いまから千百年ほど



堆積の続く磯津橋北詰め

昔の日永・六呂見辺りから塩浜にかけての土地のようすを書いたものと記されていますが、実際にはおぼろげな伝承に基づいて後世に描かれたもののようなようです。
図の左端に「打辺川」と書かれているのは、現在の「内部川」

です。右下寄りに書かれている洲浜先の鳥居は、海山道の洲崎浜宮神明社でしょう。左下方の「タヌキ林」から鳥居に通ずる道は現在の塩浜本町から馳出・海山道に至る集落の辺りではないでしょうか。

鳥居の右方（北）から上方（西）にかけては深い入江になっていて、中程に「大セ・中のセ」と書かれた洲があります。これは現在の日永の「大瀬古・中瀬古」と言われています。この頃は日永方面も西の山近くまで海が入り込んでいて、大瀬古・中瀬古はわずかに海に浮かぶ中洲でした。六呂見辺りもどうか土地らしいものが出来はじめたばかりのように見取れます。また、上の方に「天白川」と出ていますが、川が小さくて土砂の堆積が進んでいないことが分かります。

いずれにしても、塩浜方面はヨシ原の間に荒地が広がっているだけで、まだまだ人々が集落を作って定住できずる状態ではなかったものと思われれます。

江戸時代の「古屋草紙」という書物に、この地方は「約七百年頃 三重郡河後郷に属し、川尻・大治田・小古曾・追分・今宿（河原田）・大里・塩浜・一色（川合町）・馳出の総称である」と出ていますから、平安時代には塩浜の地にも人が住み着き、ある程度の村落があったものと思われれます。（四日市市史昭和三十六年版）